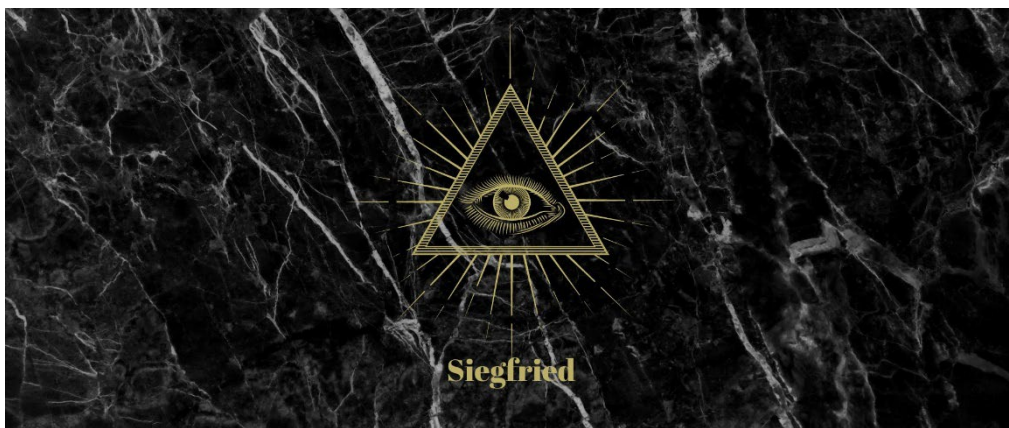


第三話 らんすい 爛酔



—— その 目 で見届けろ ——

※留意点

第一話～第三話までの間、探索者がロストすることはない。

この話数の間はヴェルゼが形成した仮想空間の中で展開されているためである。

万が一以下のような状態になった場合は特殊処理を行う。

▶HP が 0 以下になり、なおかつ蘇生に失敗した。

死亡判定が入った場合、即座に HP を全回復させ起き上がらせる。

ただし最終話での判定にマイナスが入るため描写などでそれとなく無暗に死ぬことがないように伝えること。

【描写例】

あなたはたしかに息絶えた。

視界が黒く染まり、意識が途絶えようとしていた……その時だった。

貴方の体はまるで時間が巻き戻るように再構築されていく。飛び散った肉が、臓物が、逆再生した映像のようにあなたの体のもとへと戻っていく。気が付けばあなたは平然と起き上がり、当たり前のように心臓は拍動を始める。

なのにどうしてだろう、この嫌悪感と違和感は。〈SANC 1/1D6〉

▶SAN 値が 0 以下になってしまった、SAN 値が吹っ飛んでしまった場合。

即座に SAN 値を SAN 値が 0 になってしまった SANC 判定を行う前の SAN 値まで戻す。ただし最終話での判定にマイナスが入るため描写などでそれとなく無暗に死ぬことがないように伝えること。

【描写例】

あなたの正気は目の前の異常になすすべなく散り散りとなり、ぶつんと糸が切れるようにしてあなたの正常な思考を止めてしまった。今のあなたは息をして生命活動を維持するのみの肉塊に過ぎない。そのはずだった。暗黒色に染まったあなたの濁った眼に光が戻る。あなたの目は再び世界を視認する。なのにどうしてだろう、拭いきれない違和感と嫌悪感があなたの中に渦巻き続けているのは。〈SANC 1/1D6〉

※シナリオの読み方

◇ …… 技能ロール

■ …… 公開情報

◆ …… 秘匿情報(HO 専用情報)

★ …… クリアに必要な情報(KP 側からなるべく提示すること)

▼ …… イベント/区切り

{ } …… 名称変更可能箇所(新 CCFOLIA での使用を想定)

■ KP 情報については右の灰色枠の中に記す

— 以下、シナリオ本文 —

シナリオ本編

序(マスターシーン)

ぺらり。ぺらり。本を ^{めく} 捲る。

二人は金髪の青年の持っていた不思議な本「呪われし者たちより」を読み進めた。そしてそこに記されてあった「シアエガ」と呼ばれる神と、それを祀る「フライハウスガルテン」という村の存在にたどり着くこととなる。

エルダとの再会、そして T.O.G の襲撃 シアエガの復活。

惨劇の最中、突如世界は崩壊し不思議な場所へと誘われる二人は、今まで居た世界がどうやら「作られた世界」であること、そして現実の世界でも同じようにシアエガが復活してしまっていることを知る。

今現実世界はどうなっているのか。現実に戻るにはどうしたらいいのか。

ヴェルゼは一体何者なのか。

謎は、深まるばかり。

□ □ □ □ □ □ □ □

基本的に PL・PC の RP は入らない。このシーンは PL に向けて語り掛けている。

COC シナリオ 爛爛

第三話「爛酔 - らんすい - 」

夢 HO1 (マスターシーン)

がさがさと木の葉の擦れる音、ぬかるんだ土を踏みしめる駆け足の湿った足音。

ぜえぜえと絶え間ない ^{ぜんめい} 喘鳴 交じりの呼吸と、耳元で聞こえる血流のどくどくという生々しい脈動。

霞む視界の中、あなたは……否、視界の主は、暗い森の中を走っていた。

現実感を伴わない、フィルムを通して見るような、おぼろげな光景。

——あなたは、目覚める前にふたたび夢を見ているのだと、自覚する。

前方には{HO2}が走っていた。先導してくれているようだった。

ぐんぐんと木々の隙間を走り抜ける間、自分達以外の複数の足音が雨音に混じって聞こえる。追われているのだ、とあなたはすぐに理解するだろう。

走っている間視界の主は絶えず空いた片手で腹を擦っていた。腹は大きく膨れていた。妊婦なのだろう。

「{HO1}、大丈夫、大丈夫だからね」

「お母さんが絶対に守るから」

切羽詰まった、途切れ途切れの声が聞こえた。くぐもったように聞こえるのはあなたが腹のなかで聞いた記憶だからなのだろうか。

木々のざわめきがいつそう強くなる。

そして気が付けば森を抜け、奇怪な色の空に浮かぶ太陽の光が目を焼いた。

白んだ視界のなか、大樹がこちらを見下ろしているのが見えた。周囲に樹はそれしかない。

樹は、枝をこちらに伸ばして掬い上げると、優しく包んで持ち上げた。

声が、聞こえた。

まるで樹の幹が地面から水を吸い込む深い脈動のような声だった。

^{よこしま} 「邪 なる血を持つ者よ。しかしお前達に罪は無く、母子の別れの宿命の哀れさたるや」

「幼き外なる者よ。天球の歌姫よ。お前の在り様の稀なこと」

「老いぼれは歓迎しよう。この ^{しとね} 褥 に迎え入れ、新たな命の誕生を見守ろう」

枝は視界の主と{HO2}を守るように囲い込む。

枝の隙間に、こちらを見つめるギリシア風のかぶとと長い緩やかなローブを身にまとった、人間離れした神々しい雰囲気の良い女性が見えた。

目は憎悪、警戒、あらゆる負の感情を伴った色をたたえている。

女性は枝の隙間をぬってこちらに近づくと、その陶器のような白い手を伸ばし

—————

そこで、視界は暗転する。

夢 HO2(マスターシーン)

頬に冷たい感触を感じて目を開く。

寝心地の悪い硬いマットときついリネンと消毒液の香りのするシーツ。

ひんやりとした冷感を伴ったそれは、安らかな睡眠をとるには粗雑なものだ。

現実感を伴わない、手触りがあるだけのおぼろげな光景。

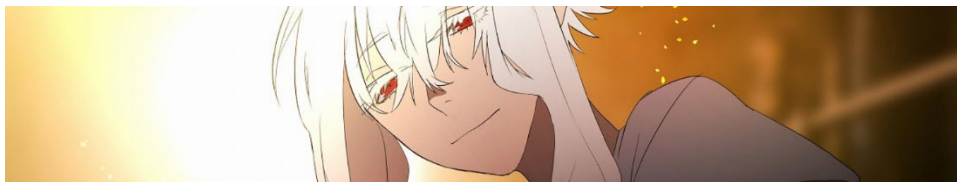
——あなたは、目覚める前にふたたび夢を見ているのだと、自覚する。

そこはどこか見覚えのある病室だった。前に{HO1}と一緒に見た映像の中にあった、あなたとリンと呼ばれた少女、エルダがいたあの場所だ。

周囲にはあなたのベッド以外に 2 つほど同じような造りのベッドが置いてあり、 布団が上下していることから、誰か眠っているのだろうと思う。

あなたが上半身を起こすのであれば、そのうちの 1 つが気付いたのか、もぞりと身じろぎして 布団の間隙から顔を出してこちらを見た。

エルダだった。



「どうしたの、眠れないの？」

「子守歌を歌ってあげる、おいで」

エルダはあなたに向かって両手を広げている。

そちらに行こうと、行かずとも。エルダは優しく微笑んで小さな声で歌いだす。どこまでも優しく、慈しみに溢れた歌声だった。

あなたは知っている。エルダの、そしてあなたの歌声は本来邪なる神々を呼び起こすためのものだったと。それでも人のために歌うことを選んだエルダの歌は神々への愛を謳うものではなかった。

ちっぽけで矮小な人間、あるいはかけがえのない片割れのためだけのものだった。

……あなたの歌は、誰のためのものだったか。

■ スチル

エルダの子守歌(導入 HO2 夢)

〈アイデア〉

前回聞いた子守歌と同じ旋律であると気付く

抗いがたいまどろみに目を ^{つむ} 瞑れば、次目を開けた時、場面は移り変わっていた。

冷たいコンクリートの壁、鉄格子、錆びた鉄の匂い、腐敗臭。
金切り声、断末魔。

白衣の人間が自分とエルダ、そしてリンを囲んでいる。

軍服を着た男達はあなたたちを嘲笑う様に見下ろしていた。

あなたたちはきつく身を寄せ合って互いを守ろうとそれらをきつく睨む。

もう何も奪わせない、何にも冒させないと誓って。

しかし非情にも寄り添いあっていた体は引き離される。

あなたは知っていた。この後何が起こるのか。ここが何をする場所だったのか。

——人体実験。

生きたまま腹を裂かれたことも、体の一部を切り落とされたこともあった。

訳も分からないまま薬を注入され体中を針で刺すような痛みの中死ぬこともできず、どれだけ泣き叫んだとて、どれだけ助けを乞うたとて誰も救ってくれなどしなかった。どうして自分達がこんな目に遭わなければならなかったのか。それは未だ、よくは思い出すことはできなかったが。

地獄だった。

殺さないようにとだけ配慮された実験の最中、あなたは何を思っただろうか。

あなたたちはこの地獄のなかで互いを心の拠り所にして死んだように生きていた。殺され続けながらそれでもなお希望を持って。いつかこの場所を抜け出して自由を手に入れるのだと。

「君たちだけがぼくの心の支えだった」

「他は何もいらなかった」

「世界などどうでもよかった」

気が付けば、目の前にはエルダが居た。

周囲は真っ暗闇に染まり、エルダは、あなたと同じ赤錆色の目から涙を流している。その背後に、何もなかった暗闇に、その瞳と同じ色をたたえた大きな目が開かれた。一瞬あの日に見た怪物を思い出したかもしれない。しかしそれは明らかに異質なものだ。

暗闇のなかぼんやりとほのかな光を発しながらそれは浮かび上がる。錆びた赤色の大きな球体。その表面のひび割れた隙間は海にも似た液体で満たされ、そこから巨大な赤い目がぎょろりと形成されていた。

あなたは理解する　これが、あなたたちの元となった存在なのだと。

非情な星々と、死せるグレート・オールド・ワンにのみ聞こえる歌声でもってそれらと呼ばひ覚まし、星辰を正しく揃え、あまねく世界に恐怖と混乱をもたらす彗星。

グロース。あなたたちはかつてそう呼ばれていた。

◆HO2 HO 更新

▽HO 追加情報：義憤^{ぎふん}のブリュンヒルデ

あなたとエルダはかつて“グロース”と呼ばれる神格から分離した幼体だった。

遙か昔、地球によく似た惑星に接近した際に“歌”によってその星を滅ぼしてしまった。その星の人間が放った対彗星ミサイルに搭乗していた「ヴェルゼ」と呼ばれる青年と出会い、対話する中で“人間”を模倣し今の形となった。

そして宇宙空間を漂う中、現在の地球に墜落し、隕石……かつての自分の体あるいは外殻の中で長い眠りについたらのち、世界大戦中のナチス・ドイツの研究機関に発見され、捕獲された。

その後に研究施設で「リン」と呼ばれる“青い義眼”を嵌められた少女と出会い3人で仲良くしていたこと、耐えがたい実験や仕打ちを受けていたことを思い出すだろう。

——あなたの視界は、再び暗転する。

目覚め

あなたたちはほぼ同時に目を覚ます。

そこは{HO1}の事務所であり、探索者達はソファの上で二人寄り添うように眠っていた。体を起こせば、かけられていた毛布がぱさりと落ちた。

周囲を見やるのであれば、探索者の近くの床に座り込んで、まるで見張りでもしていたかのように壁に背を預けて眠っている金髪眼帯の青年の姿があった。

起こすのであれば目を開き、「ああ、起きたか」と応答するだろう。

「その様子だと前回のあれは覚えているようだな。今回は単なる巻き戻り、再構築と言ったほうがいいんだろうかな」

「……ああ、いやその前に、申し遅れた。助けてくれてありがとう、俺はハーゲンと言う」

そう、自己紹介を行ってくる。もし探索者が自己紹介をしようとするなら「いや、いい。知っている。{HO1}、{HO2}。俺たちは既にもう何回も出会っている」とかぶせるように言う。

少々の問答ののち、長くなるがと前置きしたうえで以下の情報を提供してくれるだろう。

■現状について

- ・ヴェルゼ、アルバの姿が見当たらない。
- ・前回のあの事件から気が付いたらここに居た。自分は探索者より先に目覚めた。

■ハーゲンについて

・自分は元々ドイツで活動しているカルト団体「神々の黄昏(T.O.G)」の調査をするためアメリカから来た。人智を超えた存在、神話的事象から人々を守る組織、所謂抗神組織に所属している。

(追及するのであれば“ニーベルハイム”という組織であることを伝えてくれる)

・同じく T.O.G を追っている組織「黄金の夜明け団」及びドイツの抗神組織「ヴァルハラの子供たち」と協力関係にある。

ネルトリンゲンに「黄金の夜明け団」の拠点がありそこに行けば何かわかるかもしれない。そこにドイツの抗神組織の人間もいるため何か聞けるかもしれない。

■不在のふたり

ヴェルゼが居ないのは世界の再構築に全システムを稼働させているため人格部分を反映できず未だ眠っている状態であるから。アルバに関しては先に現実に戻り探索者を待っている。

■自分たちはどういう関係なのか

・こうして世界が再構築されたのは一度や二度ではない。自分と探索者はかつて何度も出会っている。

・最初の出会いは探索者が T.O.G に誘拐され、フライハウスガルテンでシアエガ復活の贄として捧げられているところだった。阻止しようとしたが間に合わず{HO1}はシアエガに取り込まれた。

そして気が付くと時間が巻き戻りシナリオ冒頭の日付に戻っていた。

・それから何度かシアエガが何らかの要因によって復活を遂げ、そのたびにシナリオ冒頭の日付に巻き戻っている。毎回探索者に接触は成功するものの、巻き戻る度探索者はなぜか記憶を失ってしまっていた。

また、その旨を伝えようとするとも必ず邪魔が入ったり探索者の耳に聞こえなかったりなどの現象が起こる。

■世界は今どうなっている？

・一度目のときには「ヴェルゼ」という存在はいなかったにも関わらず、二度目の繰り返しの以降は必ず居た。

彼が何かしら核心に近いものを知っている可能性がある。

・前回の巻き戻りで分かったことは、この世界は現実とは別の空間であり、一度目の時は“世界の時間が巻き戻った”のではなく単純に何らかの要因で自分達の精神が一時的に“現実を模倣した空間”に転移している可能性が高い。

つまり二度目以降の巻き戻りはすべてその別世界でのことであり、現実世界で起こったことは覆っておらず、シアエガによる世界の蹂躪は続いている。

・現実世界の現状をどうにかするためにはまずこの世界から目覚めなければならない。

■T.O.G について

・※持っていた魔導書について言及するのであれば

任務の一環で回収したものを輸送中だったため所持していた。

・T.O.G はナチス・ドイツの傘下に入った銀の黄昏というカルト教団の末端の残党が組織したものであり、“神格”の軍事的利用を目論んでいる。

・アメリカの抗神組織であるニーベルハイムがドイツの神話的事象に干渉しているのは互いの組織的関係が良好であること以上に、かつて T.O.G がアメリカで開発されていた「ODIN」の設計データやサンプルを強奪したこともあり、その奪還と制裁の目的もある。

■今後について

現実世界の現状をどうにかするためにはまずこの世界から目覚めなければならない。そのための手がかりを探す必要があるため次の2点を提案する。

- ・ネルトリンゲンの「精霊の家」に行き情報を手に入れ 今まで失った記憶や情報の統合を行う。
- ・ヴェルゼを探す

◆HO1のみ個別情報

夢の中で見たのはシュヴァルツヴァルト(黒い森)なのでは?と思い至る。

あそこに行けばなにかわかるかもしれない、と思うだろう。

★行先に「シュヴァルツヴァルト」が加わる。

そこまで話せば、ハーゲンは{HO1}に「少しいいか?」と声をかけ顔を近づけてくる。額がくつつく直前あたりまで近づけ、目を合わせる。

右目の眼帯を外し前に見た真っ黒な目を晒す。

一瞬それがほのかに光ったかと思うと、ハーゲンは「……よし、これで良い」と顔を離れた。

◆HO1のみ個別情報

突如左目のプロビデンスの視界に「ユーザー：ハーゲンからアプリの転送を確認。アザー・ビーコンズ インストール完了」というポップアップが出現する。

「お前の目も俺たちの持つ ODIN と同じような性能のものなんだろう。それなら使えるはずだ。本来そのアプリケーションは異界の存在が我々の次元へアクセス出来るようにするコンピュータ・プログラムだが、俺たち自身が他の場所に転移出来る門を、コンピュータを媒介に構築することも可能だ。この目があるからな。門の創造と呼ばれる呪文のデジタル版というわけだ。……SF とかでもよく見る量子テレポーションと原理は似ているだろう」

「つまるところ俺たちの目があれば、知っている座標ならコストを支払って飛ぶことができる。{HO2}。お前も{HO1}と手を繋いでいれば一緒に転移はできる。絶対に手を離すなよ、何が起こるかわからん。……今回は俺が使用する」

彼はそこまで言うと{HO1}の手を取り、なにごとかを呟く。

■アザー・ビーコンズ

サブリ「星辰正しき刻」「キーパースコンパニオン(P100)」記載

すると、周囲の風景が白み始める。自身の体が徐々に砂のように崩れ、分解され、どこかに流れていくのが分かる。

……暫くすれば、足先から徐々に再構築され、視界は元に戻っていく。

気が付けばそこはどこかの室内であり、暖炉と多くの本が積み込まれた本棚机と数脚の椅子のある部屋だった。

◆HO2のみ 〈アイデア〉

前に夢で見た部屋に、内装は変わっているもののよく似ているように思う。

横に居たハーゲンは「無事についたようだ。ようこそ精霊の家へ。とは言っても俺は間借りさせてもらっているだけなのだが」と少し俯く。

ほかに人影はなく、ハーゲンはこう続ける。

「構成員のほとんどは T.O.G の連中にやられた。残った少数は出払っている。彼らには繰り返しの記憶はない」

「こちら側で繰り返しの記憶があるのは俺と、ヴァルトさんと、それからエルダだけ。ヴァルトさんはドイツの抗神組織の人間で……多分彼女なら何か掴んでいるだろう」

探索者が周囲を見回せば、暖炉の上には十字架に五芒星や複雑な文字や図形が描かれ、中央に薔薇のようなモチーフのある紋章のようなもの……黄金の薔薇十字の象られたレリーフが飾られていた。そこで初めてここが前回入ることができなかった建物の中なのだろう、と気付くことが出来た。

「茶でも出す。ここは自由に見ていてくれ」とハーゲンは部屋を後にするため、その場には探索者達のみが残るだろう。

ネルトリンゲン -精霊の家-

ハーゲンが戻るまでの間、部屋の中を自由に探索できる。

見ることができるのは「本棚」「机」「資料棚」の3つ。

○本棚

大量の様々な分野の本が詰め込まれている。

〈図書館〉

「青い星」というタイトルがつけられた、スケッチブックに描かれた絵本を見つける。どこか暖かみのある色彩で心が落ち着くような心地を覚える。

■青い星

むかしむかし、青い美しい星がありました

宇宙を彷徨う孤独な星は、その美しい星とお友達になりたいと思いました。

しかし、星が近づくとその青い星の意地悪な神様が起きだして、人間たちをいじめだしたのです。

人間のなかでとびきりやさしく勇敢な一人の青年が言いました。僕がお星さまのところへ行って、来ないようにお願いしてくるよ と。

青年の名前はヴェルゼ。左目にきれいな青い星をうめた、心優しい男の子です。

ヴェルゼは宇宙船に乗って 孤独な星の元へといきました。

孤独な星は青年を抱きとめて、星と青年は、一緒に宇宙の旅へ出ることにしました。

孤独な星は尋ねました。「寂しくないの?」と。

ヴェルゼは答えます。「寂しいよ」と。

だから星は、自分の体を青年の形と同じものに作り替えて 彼とお友達になってあげようと思いました。

星は二つにわかれて そして二人になりました。

一人は「エルダ」 もう一人は「{HO2}」

二人は青年のために歌ってあげました。

もう寂しくないように。もう悲しくないように。

ずっとずっとそうして一緒に居れば、もうだれも寂しくはありませんでした。
そしてとうとう3人は 私たちの地球へとたどり着きました。

でもそのときにはもう、青年は力尽きて 今にも死んでしまいそうでした。
青年は二つの星と別れたくないと思いました。だから今度は、自分が星になろうと決めたのです。

青年は左目にはめた青い星に 自分のところを封じ込めました。
そして長い時間、彼らはずっと、地球の地面のしたで一緒に眠っていました。

でもあるとき、悪いひとがやってきて 彼らを起こして連れ去ってしまいました。
青年の青い星と、二つの星はとうとう、悪いひとたちに捕まって、たくさんのいじわるをされました。

青い星は いつしか「リン」という女の子の左目になりました。
「リン」は とても心優しい女の子でした。
だから、エルダも{HO2}もすぐにお友達になりました。

どんなにつらいことがあっても、3人……いいえ、4人で一緒にいればなにも
つらくありません。

いつかここを出て みんなで自由になろう そうお約束をしました。

ある時4人は、いじわるな大人たちから逃げました。
もう痛いことも。苦しいこともされずに済むのです。
リンは愛する人と結ばれて エルダも{HO2}もずっと一緒に暮らしました。
青い星は今、私の左目にあります。リンお母さんから貰った大事なお友達です。
そして私がいつか子供を産んだら、その子にこの青い星を託そうと思います。

〈目星〉

ページの最後に「親愛なる{HO1}へ、お母さんより。いつかあなたに私たちの
大事な友人を託すその日に向けて ノルン」
と書かれていることに気付く。

◆HO2のみ個別情報

あの夢の通りであれば、この絵本はリンの娘が書いたものであり、あのあと大人になった娘がリメイクしたものなのだろうと思う。であるならば、絵本の内容からもリンは{HO1}の祖母にあたることにも気付ける。

○資料棚

ガラスの扉のつけられた資料棚だ。

中にはファイリングされた多くの資料が並んでいる。

〈図書館〉

「詩人の言葉」と書かれた資料を見つける。

ここが秘密結社の本拠地、ということもあり、恐らく重大な情報を記したものを偽装するための全く無関係なタイトルなのだろうと思い至る。

■ 詩人の言葉

スノッリのエッダという1222年ごろにアイスランドの詩人スノッリ・ストゥルルソンが著した詩の教本における「詩人の言葉」から引用している。

■資料「詩人の言葉」

いくつかの項目に分かれている。

「神々の黄昏」に関する事柄

「ネメシスとプロビデンス」

「シアエガの子ら」

そして最後に「ケース：再構築」と書かれた謎の項目がある。

■神々の黄昏

アドルフ・ヒトラー及び国家社会主義ドイツ労働者党による支配下のナチス・ドイツでは、かつてオカルト的儀式や研究が行われていた。

その中でナチスはトップを失い衰退しつつあったカルト教団「銀の黄昏」とのコネクトを持ち懷に迎え入れていた。彼らはナチスの研究機関の1部門として国からの支援を受けながらオカルト的な研究や実践、軍事利用、及び非道な人体実験を行ってきた。

当時ナチス高官が手に入れた魔導書「呪われしものたち」の中に記されたシアエガを研究の対象とし、その開放と制御(軍事利用)を目論んでいたのだ。

しかし、ナチス解体後は制裁を恐れ散り散りになり、現在では残党が「神々の黄昏(T.O.G)」と名前を変えドイツに潜伏している。

ナチスの親衛隊のカルト的な気風を受け継いでおり、秘密結社が好んで使うプロビデンスの目をシンボルマークとしている。大きな一つ目をかたどることが多いシアエガの示唆でもあるのだろう。

また、親衛隊が所有していた髑髏リングを模倣し、黄金の髑髏リングを会員証代わりとしている。

■ネメシスとプロビデンス

ナチス傘下に入った銀の黄昏の末端(後の神々の黄昏)が研究していた生命体とオーバーツの呼称。

ネルトリンゲンの地下深くに埋没していた隕石の中に眠っていた人型の2体の生命体「ネメシス」と、当時の技術では考えられないテクノロジーで構成された宇宙船らしき物、そしてその内部に居た白骨死体の左目に埋まっていた謎の球体「プロビデンス」。これらの名称は発見後暫定的につけられたものだ。

「ネメシス」は人間に非常に近い構造を持つが、地球外の生命体……それこそ神話生物が人型に変異したものだと考えられる。「歌」によって神話生物を活性化させる能力を持つ。

「プロビデンス」は発見当時の状況から義眼として左目に埋め込み使用するものだと判断され囚人や収容所の人間を用いて実験を行っていた。その中でこの義眼の特性を用いて「シアエガ」を制御し軍事利用する計画が出来上がった。

その際に用いられたのが「シアエガの分身」として銀の黄昏教団に捕縛されていた「リン」という少女であり、左目を摘出後「プロビデンス」を埋め込まれた。

■シアエガの子ら

シアエガの落とし子 あるいはシアエガの分身。

人間に非常に近い構造をしており、自分自身が分身であるという自覚はない。

無意識下で親であるシアエガの復活のために動く性質がある。

シアエガ復活の折には親であるシアエガと融合し一体化する。

ナチス・ドイツが崩壊するまでに研究施設には十名程度の分身が集められた。

また、この性質を利用して、プロビデンスを装着したシアエガの子らをシアエガに融合させることで、内側からシアエガの組成を改変、制御下に置くことで従属化させようとしたようだ。

■ケース：再構築

シアエガの復活は過去に何度も起こっている。

そのたびに旧き神による「巻き戻し」及び封印が繰り返されてきた。

時空を司るヨグ=ソトースの慈悲深き一面とされているヤード=サダジという旧神による時間の巻き戻しは、決して人間にとって都合の良いことばかりではない。何かしらの重大な、しかしその巻き戻しの確定的な根拠にならない世界崩壊の爪痕を残す。全てが元通りになるわけではないため注意が必要。

※最後の行に「我々は繰り返してはいけない」「マザーの犠牲を忘れるな」と書かれている。

■ マザー

リンのことである。

〇机

机の上には小さな本立てが置いてあり、数冊よく使っているであろう資料が並んでいた。

〈目星〉

資料の影に隠れるように手帳が紛れていることに気付くことができる。手帳はかなりぼろぼろであり、年季が入っているように感じられた。

中身は日記のようだが毎日こまめに書かれているというよりは、必要な時に必要なことだけを書いているような印象だった。

表紙の裏には「リン」と書かれている。

■リンの手帳

・1945 年：ようやくあの悪魔達の元から逃げることに成功した。

エルダ、{HO2}、そしてヴェルゼの眠っていたこの地に来ることができようとは思わなかった。今日からが私たちの本当の人生の始まりだ。あの実験施設で苦楽を共にした仲間たち……散り散りになってしまったもの達を集めよう。

きっとあの魔の手は未だ私たちを探している。互いを守り、帰る場所を作らなくてはいけない。銀の黄昏に対抗する 黄金の夜明けを迎えるために。

……以下、{HO2}とエルダ、プロビデンス内のヴェルゼとの幸福な日々が続られている。やがてリンは愛する男性と結ばれ子を作るが、男性はかなり早くに病で亡くなったようだ。

・19XX 年：娘が 10 歳になった。私はもうそろそろプロビデンスを扱うには体力も何もかもが衰えてしまった。ヴェルゼと直接話せなくなるのは悲しいが仕方がない。娘に、プロビデンスと我が友ヴェルゼを託そうと思う。

・1960 年：ドイツの抗神組織「ヴァルハラの子供たち」と同盟関係を組んだ。彼らは長くドイツに存在する組織だ。力になってくれるかもしれない。

・19XX 年：娘が結婚した。めでたいことだ。エルダと{HO2}も喜んでいる。

各地から同胞も次々にこの精霊の家に集っている。にぎやかになる度に嬉しく思ってしまう。

・(HO1 が生まれた年)：娘に子供が出来た。名前は{HO1}という。

かわいい私の孫だ。どうかすくすくと育ててほしい。だがこの子にも私たち「シアエガの子ら」の血が引き継がれてしまった。フライハウスガルテン、ドゥンケルヒューゲルに惹かれる未来が訪れるやもしれない。その前にこの子にも正しい知識を授けねばならない。

……最近奴らの動きがまた活性化している。気を付けねばならない。

〈知識〉 〈歴史〉

1945 年はナチス・ドイツが連合国軍に敗北した年だとわかる。

◆HO1のみ個別情報

上記を読んだとき、{HO1}、あなたは理解する。

あなたはシアエガの落とし子の血を引く者だ。あのシアエガの眠る地に惹かれたものなにもかも、あなたの血に深く刻まれた因縁だったのだ。〈SANC1/1D4〉

〈目星〉

手帳に写真が挟まっているのを発見する。そこにはお腹の大きな女性が一人。そしてリン、{HO2}、エルダが笑って写っている。その笑顔はとても幸せそうだ。

HO1のみ 〈アイデア〉

今までの資料から察するに、このお腹の大きな女性が自分の母親なのでは？と確信する。

◆HO1 HO 更新

▽HO 追加情報：追憶のジークフリート

あなたはシアエガの落とし子の血族だ。あなたの左目は祖母であるリンからその娘・ノルン……あなたの母親に受け継がれ、そしてあなたの元へとたどり着いたのだ。ヴェルゼは何らかの理由でその経緯を忘れていたようだった。

リンは、あなたの母親は、一体どうして離れ離れにならなくてはならなかったのだろうか？

◆HO2 HO 更新

▽HO 追加情報：回帰のブリュンヒルデ

あなたはナチスの研究施設からリン、エルダとともに逃げ出した。

その後は彼女らとともにここで幸せに生きていたと記憶している。

リンの娘であるノルン、彼女に子供が出来たときもあなたたちはずっと彼女達に寄り添っていた。

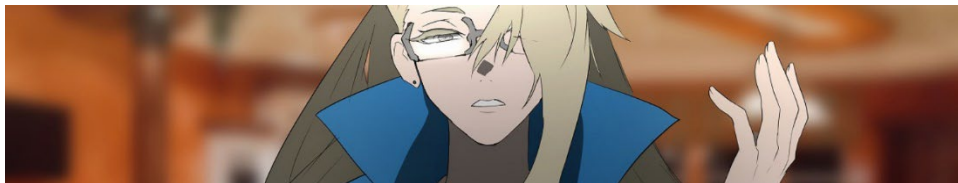
……それならば、前に見たあの夢で、幸せが壊されたあの日、リンやエルダ達は、一緒に逃げたリンの娘・ノルンはどうなったのだろうか？

▼ヴァルトラウテ

探索者達が資料を見ていると、扉がきいと開く音がした。

こつこつと二つ分の足音が部屋に入ったかと思えば、そこにはハーゲンともう一人女性が立っていた。

女性は美しい金髪をポニーテールにしており、ややスタイルを強調するようなタイトなロングスカートを身に纏っている。



「お前達がハーゲンの言っていた者だな？ 私はヴァルトラウテ。ヴァルトでいい。抗神組織ヴァルハラの子供たちの所属だ。」

彼女は平坦な声でそう告げると椅子の1つにどかと座り、まるで値踏みするようにあなたがたを見ている。

◆HO1のみ個別情報

今朝夢の中で見た美しい女性に顔が似ているように思う。

彼女は若干なぜか不機嫌そうに「とりあえず現状でわかっていることをお前たちに話す。ハーゲン、お前にもまだ共有していない内容がある。座って聞きなさい。」と告げる。ヴァルトラウテは以下の情報を提供してくれるだろう。

■ヴァルトラウテからの情報提供

- ・黄金の夜明けは{HO1}の祖母であるリンが創設したものである。
- ・ヴァルハラの子供たちは利害の一致から黄金の夜明け団に協力し、シアエガ及び神々の黄昏の監視を行っている。
- ・リンと{HO1}の母親は{HO1}が生まれる前に神々の黄昏の襲撃に遭い、リンはフライハウスガルテンにてシアエガに捧げられ融合した。{HO1}の母親は腹の中の{HO1}を守るため逃亡した。その後消息は不明である。ただし{HO1}が生きていたことから無事に出産はできたことだけはわかる。

■ スチル

ヴァルトラウテとの邂逅

■ 不機嫌なヴァルトラウテ

邪な血を引く探索者の存在をあまりよく思っていないためである。できればすぐに殺したいと思っているがアルバから止められているため手出しができなくてイライラしている。

・リンはシアエガと融合した際にヤード=サダジと呼ばれる旧き神を招来し、自分自身がシアエガの封印の贄となることを条件に世界の時間の巻き戻しを要求した。そのためそのたびのシアエガの復活は阻止されている。リンの魂は未だシアエガの中に捕らわれたままである。

・エルダはリンとともに誘拐されており、その世界再構築を目の前で見ており、リンを助けるため独自に動いてシアエガとの接触を図っていた。

そのためフライハウスガルテンに居たのだろう。エルダは自分達には非協力的だったため彼からはあまり情報を引き出せていない。

◆HO2 HO 更新

▽HO 追加情報：希求のブリュンヒルデ

あなたは思い出す。

先ほどのヴァルトラウテの話から、たしか、自分と{HO1}の母親は黒い森に共に逃げ、その先で何か大きな樹のような場所に辿り着いたのだと。

そこで{HO1}を出産した母親は死に絶え、自分は{HO1}を連れてまた逃げて、逃げて、逃げ続けていたのだと。

ただしその時のあなたも限界を迎えていた。だから近くを通りかかった夫婦に生まれたばかりの{HO1}を託して、そのまま自分はシュヴァルツヴァルトの奥深くで長い間休眠状態に入ったのだった……と。

もしかしたら自分に記憶がなかったのは長い休眠の影響なのだろうか、と思いつく。

また、ヴァルトラウテはそこまで話すと一息ついたのちに忌々し気に舌打ちした。

「先ほど話したのは我々が観測した現実におけるシアエガによる終焉シナリオの一度目の巻き戻り。恐らくこれ以前にも もしかしたらこれ以降にも 我々の知らない巻き戻りはあるかもしれない。奴のお人よしをいちいち把握しているわけではないからな……いいや、なんでもない。」

「そして二度目、私たちは巻き戻りに遭遇した。要因はお前達だ。{HO1}、{HO2}」

彼女がそこまで言うと、天窓ががらりと開く。

そこには窓枠に腰掛けこちらを見下ろすエルダの姿があった。

「要因だなんて人間きのこと言わないでよ、ヌトセ。この子たちは被害者だよ」
「その名で呼ぶなと何度言ったら分かる？……ああ、全く忌々しい。話はこれだけだ。後は奴から話を聞くと良い」

ヴァルトラウテは席を立つとつかつかと部屋を出て行ってしまう。

横に居たハーゲンは慌てたようにそれを追いかけるが、部屋を出る前に「またあとで合流する」と探索者に言い残すだろう。

エルダと言え、もう一度視線を戻せば外へと向かう背中だけが見えた。
追うことが出来るだろう。

▼エルダとの合流

外に出るとエルダが待っているだろう。銀色の髪に太陽の光を受けてきらきらと輝いている。彼はこちらに気が付くと振り向き、歩み寄ってくる。その顔はどこか心配そうな、不安そうな色を滲ませていた。

「大丈夫？ひどいこと言われてない？」

「あの人言い方きつからばくもあんまり好きじゃない」

「それに……まあいいや。とりあえず、大体は思い出して把握できたみたいだし今なら全部話せるみたいだ」

「{HO2}、君はもう最後にお別れしたところまでは思い出したかな。{HO1}、改めて、はじめまして。お母さんのお腹のなかにいたときぶりかな？君のお母さんと……おばあちゃん……リンの、お友達だ」

あの時の切羽詰まった様子ではなく、穏やかに{HO1}に語り掛ける。

その声はどこまでも優しく慈しみに溢れていた。

「ヌトセ……いいや、ヴァルト라우テが言う通り、君のおばあちゃんとお母さん、そしてぼくたちは神々の黄昏の襲撃を受けて散り散りになった。君のお父さんは殺され、ぼくとリンはフライハウスガルテンに連れ去られ、ぼくと一緒に連れ去られたリンはシアエガに……」

「お母さんは{HO2}と一緒に逃げることはできた。{HO1}が生まれたってことは、無事に君を産むことはできたんだろう。{HO2}、そのあとどうなったかは思い出せている？」

{HO2}が今まで見た夢の映像などから憶測を話す、もしくは思い出せていないことを伝えるのなら「そうか、それでも君が無事でぼくは本当によかった」と安堵の表情を浮かべ、話しを続ける。

「ヴァルト라우テから話は聞いていると思う。リンはシアエガに捧げられ、融合が行われる直前に旧き神・時空を司るヨグソトースの慈悲深い側面、ヤード=サダジを招来した。その神によって時間は巻き戻り、シアエガ自体の復活は阻止された」

「でもシアエガによってもたらされた被害や犠牲になった人間が全て元通りになるわけじゃなかった。でフライハウスガルテンの村のところどころに奇妙な崩壊の痕があっただろう？あれは巻き戻りの痕跡だ。

そしてリンも自らシアエガ封印の礎となって、内側からあの神の封印を手助けしている。感じるんだ、あの暗き丘の奥深くにまだリンが生きてるって……ぼくは何もできなかった……」

少し俯いたあと、探索者に向き直る。その目はどこか決意に満ちていた。

「…さて、過去の話はここまで。ここからは、今の話をしよう」

エルダは探索者の前に立つと、すうと一つ息を吸い　そして歌いだす。それは子守歌だった。あなたたちにだけ聞こえる声で、しかし穏やかに　そして高らかに　伸びやかに、旋律は奏でられる。

あなたたちにはこの歌にひどく聞き覚えがあった。

{HO2}、あなたはこの歌をずっと昔から知っていた。

{HO1}、あなたはこの歌を聞くのは初めてのはずだった。

それでも泣きたいほどに懐かしい気持ちになった。

……その刹那、目の前の景色が次第にぶれていく。

あなたたちの周囲にあったのはネルトリンゲンの街ではなかった。

一面火の海に包まれた荒地、いや、ここはどこかの街だったのだろう。

一面に転がるなにか黒焦げた物……これは人間だったのだろう。

そしてその惨状の中心にはあの日見た神が鎮座していた。触手をうねらせ、次々に建物を、人間を、あらゆる目の前に存在する、生きとし生けるもの、無機物をなぎ倒し蹴り殺し徐々にその体を膨張させている。

その周辺に、頭から血を流したまま倒れているエルダ　体中ぼろぼろの状態で瓦礫に背を預けているハーゲン、そして{HO2}の姿があった。

地獄のような光景のなか、エルダの声がふたたび聞こえ始めたかと思えば周囲の光景は元に戻り始める。

「これは今世界で、現在進行形で起きていること。これが世界の真実」

「この世界は、ぼくらが死の間際に見ている一瞬の夢に過ぎない。世界中の人間の魂を、絶望から救い出すために作り出された夢の世界なんだ……ヴェルゼによってね。夢引きと呼ばれる、よく邪神が用いる呪文の原理だろう」

「現実の君たちはこの世界と同じように再会していた。けれどその半ばでリンの時と同じように神々の黄昏によって誘拐され……強制的にシアエガとの融合が行われた」

「そして世界は滅亡の危機に陥った。シアエガとなった{HO1}、君の手によって」

エルダは穏やかに告げる。叱責するような意図はまったく感じられなかった。

ただただ{HO1}、あなたを気遣うように。しかし伝えねばならない事実を明確に揺らぎなく話し続けていた。

「それに君はまだ完全に融合しきっていない。その目と……旧き印があるから」

「どういう原理かはわからないけれど、今ぼくたちの精神は一時的にこの夢の世界に留まっている。このままでは君は完全にシアエガと一体化し、現実の世界は崩壊を迎える。そしてぼくたちはそれを知らないまま、この虚構の世界で生き続けることになる…はずだったんだろう」

「辛い現実から魂だけでも救いたい。そんな願いで作られた世界なのかもしれないね」

「それでもぼくたちは目覚めなくては。まだ抗うことができるのだから。……君に、君たちにお願ひがある。どうかこの虚構の世界を終わらせて。一緒に現実に戻るんだ。そしてこの絶望に抗おう。どうすればいいのかはわからないけれど。それでもあきらめたくない。君たちを……彼女が愛した世界を救いたいんだ」

「これが彼、ヴェルゼにとって幸か不幸かはわからないけれど。彼がこうして{HO1}の魂を隔離したことで シアエガとの融合を遅らせることができてる。まだ、抗う術はある」

エルダは探索者たちを抱きしめる。

君たちは悪くない、君たちのせいじゃない、そう必死に伝えようとしているようにも、鼓舞しようとしているようにも思えた。

それでもあなたたちの目の前に晒された事実は、衝撃的なものだった。

〈SANC 1/1D10〉

◆HO1 HO 更新

▽HO 追加情報：忘却のジークフリート

あなたはあの夢の中でリンが言っていた話を思い出す。

この世界は、ヴェルゼがプロビデンスの中に作り出した虚構の世界だと、確かに彼女はそう言った。

現実の自分はシアエガに取り込まれ、今の自分はそのさなかに見ている夢であり、全てを忘れて今まで過ごしていたのだと。

あなたがこれをどう感じるかは自由だ。

だが、少なからず恐怖、焦燥、あらゆる負の感情が、そして自分の知らない不確かな記憶への不安が、あなたの中に暗い影を落としたかもしれない。

〈SANC 1/1D3〉

◆HO2 のみ個別情報

【取得：「エルダの子守歌」判定：〈芸術(歌唱)〉 効果：不明】

エルダの子守歌だ。あなたやリン、そしてその娘が眠れない時いつも歌ってくれた。この歌を聞くと不思議と心が安らぐような気がする。

話を終えれば、「きっと今の話もうまく呑み込めないままかもしれないけど、なにか質問はあるかな」と問いかけてくる。

【問答例】

・ 今までどんな風に生きていたのか

「いろんな歌劇団を転々としていたよ。名前を変えて、違和感のないように潜伏していた。ぼくには歌しかないから……」

「{HO2}と{HO1}をずっと探していた。会えて嬉しい」

・ どうしてフライハウスガルテンに居た？

「この世界に来る前、ぼくはシアエガの封印が緩みつつあることを知って、生贄になることでシアエガ内のリンと接触し、封印の補強をしようとしたんだ。ぼくは男でも女でもないから、条件に合うかはわからなかったけれど」

「こっちの世界に来てもう一度あの地に行ったのは、{HO1}、君ならきっとその血の導きに従ってここにきてしまうって思っていたから。接触できるだろうと踏んであそこに居たんだ」

・ なぜヴァルトラウトたちに非協力的なのか

「ぼくはあいつが嫌いだしあの子もぼくが嫌い。だからかな」

・ 今後は共に行動するのか？

「ぼくは……ごめんね、ぼくにはやることがあるから」

会話ののち、エルダは少し寂しそうに笑いながら「さて、君たちもそろそろ目的のために行かなくてはね」「ぼくもやるべきことがある。一度お別れだ」と二人の頭を撫でる。

「今ヴェルゼは多分、休眠状態に入っている。繰り返しの負荷が今になってきたんだろう。動くなら今のうちだ。T.O.Gの連中は相変わらず動き回ってる。ぼくはそっちの対応にあたるよ」

もう一度探索者たちを名残惜しそうに抱きしめたあと、彼は去っていく。

それとすれ違うようにハーゲンとヴァルトラウテが合流する。

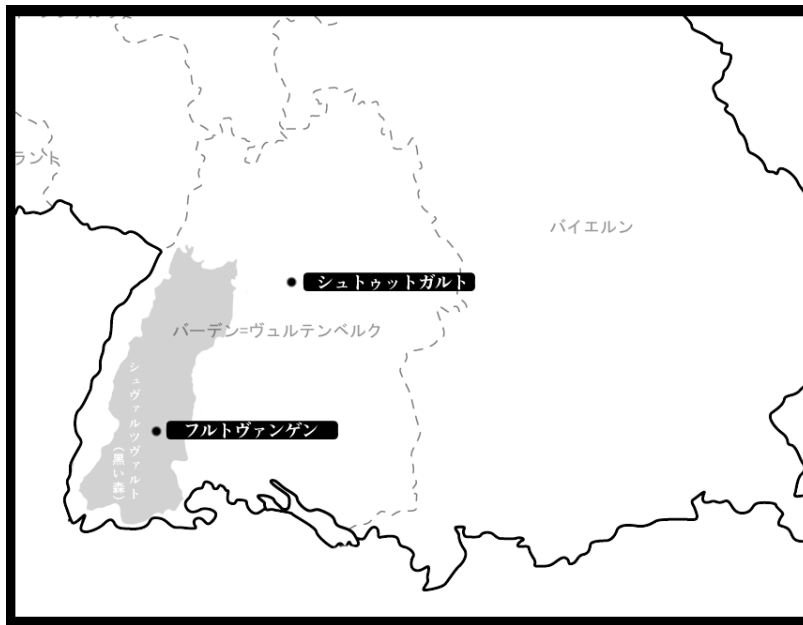
エルダとヴァルトラウトはすれ違いざま若干だけ視線で火花を散らしたようなきもするが、ハーゲンが横で宥めて何事もなく終わるだろう。

今回はハーゲン、ヴァルトラウテが同行してくれる。彼らと共に、この世界から目覚め、現実で起きている事象を解決する方法を探ることとなる。

そのためにはまず、欠落している記憶や未だ知りえていない事象を拾っていく必要がある。一行はそれぞれの目的のためシュヴァルツヴァルトへと赴く。

シュヴァルツヴァルトへ

【三話で登場する街】



ドイツ・バーデン=ヴュルテンベルク州に位置する森・山地である。

密集して生えるトウヒの樹によって森が黒く見えることからこの「黒い森」の名前がついた。このあたりに位置する街のなかのいくつかは鳩時計やおもちゃなどの精密産業で栄えた。通常時であればヨーロッパ屈指の温泉保養地であるバーデン=バーデンやテディベアと触れ合うことのできるシュタイフミュージアムに行きのんびりしたいところだが、今はそれどころではない。

とりあえずは付近の町を中心に、周囲に何か夢の中で見た出来事の手掛かりになるようなものを探すことになるだろう。探索できるのは次の二つ。

■探索可能箇所

- ・シュトゥットガルト
- ・フルトヴァンゲン

■探索について

左記の地図は場所の目安として用いる事。

実際のセッションではPLと共に現地の景色や店舗を検索しながら探索を進めると、ドイツ旅行気分を味わうことが出来るだろう。

●シュトゥットガルト

ベンツやボルシェの本社がある黒い森の入り口に位置する町だ。

交響楽団やバレエ団もあり文化的レベルの高い町でもある。

16 世紀にルネッサンス様式で建てられた旧宮殿や州立博物館もある。

ゆっくりできる時であれば見て回るのも良かっただろう。

■ここで出来る事

- ① 周辺を見て回る
- ② 聞き込み

① 周辺を見て回る

〈目星〉

ジジ、と周囲の建造物や人物、動植物がぶれて見える時がある。

例えるならゲームなどにおけるテクスチャバグに似ているな、と感じる。周囲の人間はそれらには気付いていないようだ。

② 聞き込み

人々の様子をうかがう、何か情報がないか何気なく話しかけてみる、といった理由で話しかけてみるのも良いだろう。もしくは噂話をこっそり聞くのも可能だ。

〈交渉技能〉 〈聞き耳－20%〉

話を聞いてくれそうな人、もしくはうわさ話をしている人を見つけることができる。

■シュトゥットガルトでの聞き込みで得られる情報

- ・最近夢見が悪い。何か大きな巨大な化け物に町が破壊され、自分も殺されてしまう夢をここ数日よく見る。
- ・先ほど森の中になにか人の行列が入っていくのが見えた。

■バグ

ヴェルゼによるこの虚構世界の再構築が完全に完了していないからである。

■夢見の悪さ

「夢」はこの世界に取り込まれた人々の記憶が徐々に戻ってきているためである。

●フルトヴァンゲン

バーデン＝ヴュルテンベルク州において最も高い場所にある町だ。

1852 年に創設されたドイツ時計博物館があり、時計の歴史や実際当時使われていた時計などの展示がある。

現状、時計を見る間もないほど切迫しているためゆっくり見る時間はなさそうではあるが。

■ここで出来る事

- ① 周辺を見て回る
- ② 聞き込み

① 周辺を見て回る

〈目星〉

道の端で占いをしている女性を見かける。誰も見向きもしてはいないものの怪し気にローブを目深に被った出で立ちだ。明らかに異質な存在感であるのに、誰も怪しさに気づいていないのが逆にそれを際立たせた。

探索者がこちらを見ているのに気づけば「おや、そこの旅人。よければ占っていきませんか？」と声をかけてくる。その声はどこまでも凜としており、抗いたい何かを感じる。

〈聞き耳〉

横に居たヴァルト라우テが「イシス…お前…」と少し呆れたような声を発しているのがわかる。

探索者がそちらに近づくのであれば、手に持っていたタロットカードをシャッフルしはじめる。

机の上にくいつか並べたかと思えば、探索者に一枚を選ぶように指示する。

※ここはどのカードを選んでも下記の結果が出る。結果は秘匿で渡しても、公開で渡しても良い。なお手順は本来のタロットカード占いと異なる。簡略化したものだ。

■ 怪しい人物

なんてことはない、気まぐれでこの世界に紛れ込んだ旧き神「イシス」である。【マレウス・モンストロルム/ P137】

◆HO1

{HO1}が引いたカードには木に片足を結び付けられ、逆さに吊り下げられた男の絵が描かれている。

〈知識 1/2〉 〈オカルト〉

これが「吊るされた男」であるとわかる。一見刑罰を受けている囚人のようにも思えるが、実際「北欧神話」においてルーン文字の習得のためにユグドラシルと呼ばれる大樹で首を吊ったオーディンという神が元になった、という説がある。もしくは、イギリスの古いタロットカード占いにおいてはここに金の入った袋を持たせ「反逆者」というタイトルをつける場合もある。

◆HO2

空中に巨大な天使が描かれており、右手はラッパを持ち、左手は十字の紋章の入った旗を指差している。地上には棺の中に立ち、こちらに背を向けた人物と左右を1組の男女が囲んでいる。

〈知識 1/2〉 〈オカルト〉

これが「審判」のカードであるとわかる。

天使は「最後の審判」においてラッパを奏でる大天使ガブリエルだろう。

つまるところ、この絵が示すのは新約聖書の「ヨハネ黙示録」の最後の審判の場面であり、世界の終焉に際して人間が生前の行いを審判される場面なのだろうと思われた。また、ゾロアスター教においては全ての人間が復活し、そこに彗星が降り注ぎ、不浄の者も浄化されたのち全ての人間が理想世界に生まれ変わるとされている

カードの意味を聞こうと顔を上げた時にはすでに占い師の女性はいなくなっていた。

② 聞き込み

人々の様子をうかがう、何か情報がないか何気なく話しかけてみる、といった理由で話しかけてみるのも良いだろう。もしくは噂話をこっそり聞くのも可能だ。

〈交渉技能〉 〈聞き耳－20%〉

話を聞いてくれそうな人、もしくはうわさ話をしている人を見つけることができる。

■フルトヴァンゲンでの聞き込みで得られる情報

- ・「アノマリオール博物館」という博物館があるらしい。そこには様々な「奇妙な一品」が展示されており 限られた人間しか行くことができないのだという。
- ・アノマリオール博物館に不思議な時計のレプリカが展示されているらしい。
- ・先ほど奇妙な一団が森の中に入っていくのが見えた。

■ 不思議な時計

この「不思議な時計」はシナリオには全く関係がないことをPLに伝えて良い。同シナリオ企画において発表された『静なるテロリスト』(作：ジャック秘密探偵社様)において登場する時計のレプリカである。(作者様より承認済)

ボーナスターン

第三話幕間のボーナスターン。

二つの町の探索が終わったあたりで暗くなるため、1 日目の探索を終了することになる。近くのホテルをとり、一時休むこととなるだろう。

ここでは「休息する」「NPC と会話する」を選ぶことができる。

■ボーナスターンで出来る事

- ・休息する

休息に集中し S A N 値を 〈1□10〉 回復させることができる。

P C 同士の会話の時間としてもいいだろう。

- ・NPC と会話する(ハーゲン/ヴァルトラウテ)

NPC とより仲を深めることができる。ボーナスターン専用のイベント。

NPC と会話する

ハーゲンは夜の散歩をしつつ周辺の警戒。

ヴァルトラウテはホテルのカフェで一服しているようだ。

●ハーゲン

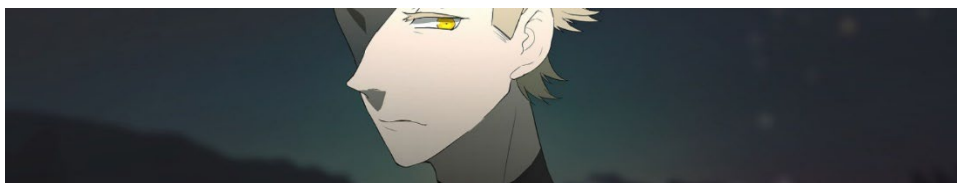
夜にロビー辺りを歩いていると外に出かけようとしているハーゲンを見かける。

声をかけるなら「外を警戒してくる」と用件を伝えてくれるだろう。

もしついてくると宣言するのであれば彼は承諾する。

夜の静まりかえった町を二人で歩く。

彼は元々無口なほうなのだろう。言葉少なではあるが探索者の言葉に耳を傾け真剣に話を聞いている様子はある。真面目なのだろうと感じるかもしれない。



■ スチル

夜イベント：ハーゲン

探索者が聞くのであればある程度自分の素性などを話してくれる。

元々ドイツに住んでいたがアメリカに親の都合で引っ越したこと、小さい頃に仲の良い友達がドイツにいたことなど。ニーベルハイムに所属した理由に関しては、元々FBIに所属していたのを引き抜かれたのだと話してくれる。

◆来たのがHO1だった場合

「お前、ずっと前に俺と会ったことがないか？」

「いや……人違いだろう。すまん」と聞いてくる。

〈アイデア〉に成功すると、たしか昔金髪金眼の小さな男の子が自分に懐いていたような…？と思い出すことが出来る。第一話のボーナススターンで{HO1}が思い出していた場合、追加で「将来絶対迎えにくるから僕のお嫁さんになって！」と言っていたことを思い出すことができる。

■報酬：SAN 値回復〈1D3〉

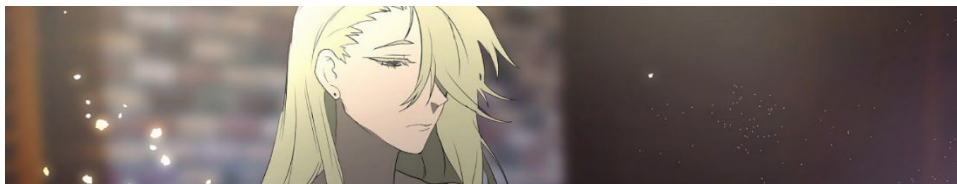
●ヴァルトラウテ

ホテルの喫茶店でコーヒーを飲んでいる姿を目撃できる。

一緒に過ごしたいと提案すれば少し苦い顔はするが了承する。

探索者が質問すれば日中に提示した内容などに関しては再度説明してくれる。

彼女自身のことに聞かれると「お前には関係ない」と一蹴される。



ある程度会話をしたのち「そういえばヤード……ああいやここではアルベリヒか。あいつはどこにいる？」と聞いてくる。知り合いなのかと問えば「まあ古い知り合いだ。あまり好きではないが」とのこと。今はいないと応えれば「ん？……そうか。なら先に帰ったのだろうな」と少々残念そうにする。

若干冷たい印象ではあるが探索者の話には応じる。不器用かつ短気ではあるが根は悪い人柄ではないのだろうと察することはできるかもしれない。

■報酬：SAN 値回復〈1D3〉

■ 仲の良い友達

HO1 のことである

■ スチル

夜イベント：ヴァルトラウテ

託されたもの -H01 秘匿-

夢を見る。

不思議な空間だった。

見上げるほどの大きな樹と不可思議な色彩の空、その樹の根元には一人の赤子を抱えた女性と、それを心配そうに見守る{H02}の姿があった。

女性はあの手帳で見つけた あなたの母親・ノルンだった。

彼女は息も絶え絶えに赤子を抱きしめ、そしてその赤子の左目に手をやったかと思えば、なにごとかを呟く。母は一瞬、苦悶の表情を浮かべたが、次に手を離れた時、赤子のうっすらと空いた左目には青い光が宿っていた。

プロビデンスだ。あなたはそう思うだろう。

「ごめんね、お母さん。傍にいられなくて」

「ヴェルゼ、{H02}。お願い。この子を守って……」

「一生のお願いよ」

母は泣いていた。空洞な左目の眼窩からぼろぼろと血のような涙を流しながら。産声が木霊する。これはあなたの産声だった。

「ノルン、だめだ、そのままでは君が死んでしまう 早く僕を君の体に戻すんだ」

ヴェルゼの声が聞こえる。あなた自身のすぐ傍……否、あなたの左目から。悲痛な叫びに彼女は首を横に振る。

「かなうなら 普通の子供として生きてほしい でも、きっと、この目で危険に晒されることもあるかもしれない。それでも、あなたが居るから。あなたがきつとこの子を守ってくれる」

「ノルン……」

「ヴェルゼ、今からあなたの記憶にロックをかけるわ。この子にとって来るべき日まで、どうか何も知らないまま、この子の親友になってあげて……」

徐々に遠のく意識の中 優しい声が聞こえた。

「愛してる」

「母さんの心はいつまでもお前の傍にいるわ」

そうして、あなたはまた意識を再浮上させた。

▼愚者のパレード

朝が来る。

偽りの世界であるとしてもなお、世界は変わらず時間は流れている。

どうやら精巧に世界を物理法則、天体、全てを模倣したもののように思えた。

そんな中、再び調査のため動き出すこととなるだろう。

〈目星〉

ホテルを出て次はどこに行こうかと考えているとき、町のなかを奇妙な格好の集団が歩いているのを見かける。

〈聞き耳〉

シャンシャンという鈴のような音が聞こえる。

集団達はピエロのような恰好をしており、一様に仮面をつけている。体には大きな鈴をつけており、彼らが動く度にシャンシャンという鈴の音が響き渡った。

集団の中には何か積み荷を乗せた手押し車もあり、積み荷には布がかぶせてあった。

〈知識〉

黒い森の伝統のカーニバルである「愚者のパレード」と呼ばれるものではないか？と思い至る。しかしこのパレードは2月の末あたりに行われるものであり、今の時期ではない、とも思うだろう。

集団は森の中のほうに歩いていっている。人々は季節外れのパレードに驚愕しながらもその集団の後を付いて行ったり、面白がって見たりしている。

探索者達が興味本位で、あるいは彼らを怪しみ付いていくのであれば、森の奥のほうへ行くにつれて自分達以外の人間は追従するのをやめていき、ついにこの奇妙な集団と自分達だけが暗い森の中を歩いている。

ふ、と。楽しげな雰囲気では歩いていた集団が、ぐると一斉にこちらに顔を向ける。一瞬音が止んだのかと錯覚するような静寂が辺りを包み、そして彼らは探索者達の逃げ場を潰すかのように取り囲む。

しまった、と思った時にはもう遅かった。

その刹那、積み荷の布がはがされ その中からはあの蛙の化け物が姿を現しこちらに襲い掛かってくる。

▼逃走

相手は大人数であるため、全て倒しきるのは不可能である。

一度逃走し態勢を立て直す必要があるだろう。アザー・ビーコンズを使用するにしても詠唱する間もないため、今はこの窮地を逃れるしかなさそうだ。

■逃走ロールについて

これより逃走ロールが発生する。〈DEX×5〉を5ラウンド以内に、ひとりにつき3回成功する必要がある。同時に成功する必要はない。

戦闘処理ではないのでこの逃走判定時には妨害や攻撃行動は行わない。

ただし逃走に失敗した場合、ナガアエ1体と構成員2体との戦闘となる。

※ナガアエと構成員のエネミー・ステータスは二話記載のものと同様。

この戦闘で力尽きた場合は【※留意点】を参考し描写・処理すること。

逃走成功

探索者が窮地を切り抜け逃走に成功してもなお、追手を完全に巻くことはできない。追われるままに森の奥、整備されていない獣道のほうへと走ることになってしまう。

ハーゲンが舌打ちをすると「{HO1}！{HO2}！先に逃げろ！俺が囧になる」と踵を返して集団のほうへと走っていく。

懷からナイフを取り出すとそのまま追手に切りかかりつつ、探索者を気にかけている様子だった。傍にいたヴァルトラウテは「行くぞ」と探索者と共に走る。

そのままどれだけ走っただろうか。暗い森のなかを行く当てもないまま走り続ける。恐らくこのまま走っていれば森を抜けていつかは人里のある場所までたどり着くことができるのだろう、と思う。

まだ後方には追手の気配がある。ハーゲンが討ち漏らした追手だろう。

相手は少人数だ、相手にするかどうか考えていた その時だった。

突然{HO1}の左目が青白く発光しはじめる。鼓動するように点滅し、周囲にホタルのような青白い光の粒子をまき散らしている。

◆HO1のみ個別情報

どこからか声が聞こえる。「おいで」と優しい女性の声のようだった。

【アザー・ビーコンズ 起動。移動地点：ドリームランド<タラリオン> 座標：不明。座標未設定での転送は危険です。繰り返します。座標未設定での転送は危険です今すぐ操作を中断し……】

【セーフティモード解除。強制転送に移行します】

【転送を開始します】

そう機械的なアナウンスが流れたかと思うと、周囲を一瞬強い閃光が瞬いた。

一面を白い光が焼いたかと思えば、ハーゲンと共にはじめてアザー・ビーコンズを使用したときのような一瞬の浮遊感と、体が分子レベルにまで分解され、そしてまた再構築していく感覚を得る。

■ 導きの声

プロビデンスのなかにとけこんでいた母親の意識の一部が、自分自身の眠るドリームランドへと誘った。

ドリームランド

瞼の上に不可思議な光彩が踊る。

うっすらと目を開ければ探索者達は巨大な穴の中に滑るように落ちていた。

よくよく見ればそれは下に下っていく急な階段だったが、探索者達はまるで空中を滑空するように下へ下へと降りていく。階段は美しい装飾で飾られ、バロック様式に近い大理石の階段だった。

階段の下へとたどり着けば今度は炎の柱が床から天井まで伸びる巨大な洞窟へとたどり着く。洞窟内には二人の人影があった。神官のような出で立ちをした彼らはこちらに気付くと少し驚いたような顔をするものの、ようこそ、とでも言う様にお辞儀をすればあなた方を見送った。

そして洞窟の反対側にはまた下に下る階段があり まるで誘われるかのように体は風もないのに空を切り落ちていく。

空中で上下左右にゆさぶられ、もはや上も下もわからなくなったころ、階段の下方が一層強く白い光を放った。

耐え切れず目を瞑る。

……体を常時襲っていた激しい揺れは治まっていた。

代わりに体は急に宙に投げ出され、重力を思い出したかのように自由落下を始める。わけもわからないまま目をあければそこには不可思議な色彩の空が一面に広がっていた。

空に投げ出されたのだ、と直感的に理解できるだろう。

眼下には見たこともない地形の大陸が広がっていた。不毛の大地、雪に覆われた山脈、深い森に覆われた緑の大地に、広大な平原。地平線には巨大な月が浮かんでいた。そして何より自分達のすぐそばを巨大なコウモリのようなシルエットの巨大な生物や奇怪な形の鳥たちが旋回している。

ここは一体どこなのだろう？ 〈SANC1/1D6〉

なにはともあれこのままでは地面に真っ逆さまに落ちてイチゴのジャムよろしくひしゃげて死んでしまう未来は避けられないだろう。

かつてニュートンが示した物理法則の避けようのない未来に身を竦ませるかもしれない。

Ⅰ 階段と洞窟

ドリームランドの入り口である七十段の階段と洞窟神殿である。

眼下に、巨大な樹がまるで大きな腕を広げているかのように佇んでいるのが見えた。数百メートルはあるであろうその巨大な一本だけ、ぽつんと立っている樹の葉の中に探索者達はがさがさと落ちていく。

葉は人間が乗れるような大きさの巨大なものであり、それらがクッションになったことでなんとか受け身をとることができそうだった。

〈跳躍〉

成功：受け身を取りながら地面に着地できる。

失敗：うまく受け身を取ることが出来なかった。 〈ダメージ 1D6〉

散々に振り回されながらなんとか地面に足をつけることに成功すれば、徐々に上空から見えたこの地に再び目を向けることになるだろう。

かなり広大な高原であり遠くには雲のようなものに覆われた都市が見える。

もう少し先に行けば、海のような地形も見えた。

ここは一体どこなのだろう。

「おや旅人よ。夢みる人よ。これは稀な旅をしたものだ」

「記憶する限りではこんな乱暴な夢の入りをしたのはクラネス王以来かな？まあそれはそれとして ようこそ夢の世界、ドリームランドへ。覚醒世界の者よ」

どこからか老人のようなしゃがれた男の声がした。

周囲を見やればそれはどうやらこの巨大な樹から発せられているようだった。

形は美しいブランデー・グラスにそっくりであり、その背丈はゆうに三分の一マイルを越していた。雄々しく枝葉を空に向かって広げるその姿はどこか神話の世界の世界樹を彷彿とさせた。

「大いなる木」を目撃することとなる探索者は 〈SANC 0/1〉

樹は、地面からいくつかの根をぽこぽこ出現させると、探索者達を持ち上げる。そして周囲にふわりとなにか花粉じみたものをまき散らす。

それらは黄金に輝き、探索者の周囲を舞い続けるだろう。

【応答例】

・ ここはどこ？

「人間の瞳の奥、心の中、潜在意識のなかにある幻想の領域…人間によって形作られたアイデア。夢の世界…ドリームランドだよ。地球とは別世界と思ってくれればいい。地名を聞いているのであればここはタラリオンと呼ばれている地だ」

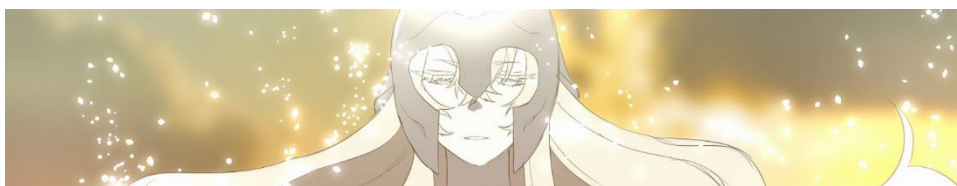
・ あなたは一体？

「私は大いなる木。安心せよ、あなたがたの敵ではない。私はこのようにのろまであるから、こうして旅人との束の間の触れ合いを楽しみにしているのだ。少しの戯れを許しておくれ」

・ 乱暴な夢の入りとは？

「普通とは違う経路でこの夢の世界に辿り着いたようだ。覚醒世界にはいくつかドリームランドに通じる場所がある。ドイツのシュヴァルトヴァルトだとかはそうだが。しかるべき道順を通してやってくるものがほとんどではあるけれど、君達のように気が付いたらこの世界のある地点で急に目覚めた、放り出された、なんてことも少なくはないよ。もっとも君たちは覚醒世界からここへ来たわけではないようだけれど」

暫く話をしていれば、樹は近くに居たヴァルトラウテの方に枝先を向けながら「そういえばヌトセ=カームブル。君はいつまでその姿でいるつもりなんだい？」と、話しかけた。彼女はひとつため息をついたのち、その体は徐々に黄金の光に包まれていく。金色の美しい長い髪はギリシア風のかぶとに収まり、美しい体は長いローブに包まれていく。開かれた目はオパールのような色彩を放っていた。



■ スチル

ヴァルトラウテの変身

旧き神、ヌトセ=カームブルを目撃することとなる(SAN 値減少はなし)。

変容を終えた彼女は探索者の方を見ながら「私はヌトセ=カームブル。邪な神々の系譜を打ち倒すべく存在する旧き神がひと柱」と素っ気なく名乗った。

◆HO1のみ個別情報

夢の中でみたあの美しい女性だ、と確信する。

【応答例】

・旧き神とは？

「邪なる神々に対抗する善なる神だ。かといって必ずしも人に友好的なわけではない。私の関心ごとは邪な神々への完全敗北のみ……。もっとも、お人よしの奴もいるのだが」

・昔に会ったことがある？

「さあな」

・どうして人間に擬態していた？

「後々分かるだろう」

樹はそれを見たあと、話を切り出してくる。

「さて、旅人よ。この空間であれば何者の邪魔も入らんよ。この花粉はあらゆる夢への干渉を無効化する効果があるのだ。なにか困っている様子、良ければ私にお前達の記憶を見せてはくれまいか？」

「なあに、恐ろしいことはせんよ。お前達の意識に私の意識を繋いで、お前達が今まで何を見て、何を体験してきたのかを共有してほしいのだ。ここから動くこともままならん老いぼれの楽しみなのだ」

了承するのであれば、樹は一本太い枝を探索者の頭に優しく触れさせる。

枝が体中に這うような一瞬の不快感はあるものの、すぐにそれは消えた。

まるで記憶を遡るかのように過去の記憶が走馬灯のように脳裏を駆け巡っていく。樹はそれを共に見ながら、「おお、これは」と声を上げた。

「何たる稀有なことよ。お主ら、肉体は覚醒世界にありながら 精神のみことは別のドリームランドに捕らえられておる。そしてこの記憶は……。成程、シアエガは既に解き放たれておるのか」

「そしてお前は、そうか、あの時の子供か 大きくなったものだ」

そう、穏やかに{HO1}へ向けて呟くだろう。

樹は以下の情報を提供してくれる。

■ ヌトセ=カームブルの動向

シアエガ復活の後探索者たちとともにヴェルゼのドリームランドの中に突入し、探索者達の動向を探りつつ覚醒世界のシアエガの対応を思案していた。

■大いなる木から得られる情報

- ・{HO1}の母はシュヴァルツヴァルトに逃げた際に偶然ドリームランドの入り口に辿り着き、この樹の根元に辿り着き、ここで{HO1}を産んで死んだ。
- ・その時にシアエガの気配を察知してきていたヌトセ=カームブルが{HO1}を始末しようとしたところ、{HO2}が庇い、大いなる樹の説得により見逃した。
- その代わりに{HO1}の体に「旧き印」を刻み邪な神々の血に対抗できるようにした。覚醒世界の{HO1}が完全にシアエガに取り込まれていないのはこのおかげでもある。
- ・その後{HO2}とともに覚醒世界に送り出した。{HO2}はその時点で瀕死の重傷を負っていたため運が悪ければそのまま死ぬだろうと思っていた。

◆HO1のみ個別情報

旧き印。自分の体にある奇妙な五芒星のアザはこれだったのだ、とすぐに確信できるだろう。

語り終えた大いなる木は、自身の幹を少しずつ動かす。

まるで胎動のように脈打つ幹が何かを吐き出すようにして内部に覆い隠していたものを外に排出した。それは人間の骨だった。服装からそれが女性だとわかる。

◆HO2のみ個別情報

間違いない。この服装に見覚えがあった。{HO1}の母があの日着ていたものだ。

木は穏やかに{HO1}に向かって「彼女はお前を産んだあと、その左目を託して死んだ。」と語った。

「彼女は最後まで母としてお前を守り切ったのだ。その左目が 左目の中に居る友人が、そして{HO2}が必ずお前を守ってくれることを信じて」

「もしかしたらお前達を導いたのは彼女なのかもしれないな」

◆HO1 HO 更新

▽HO 追加情報：喪失のジークフリート

あなたはこのドリームランド、神話の世界で産み落とされた。

目の前の彼女はあなたの母親だった。

そして横に居る{HO2}は生まれたばかりのあなたを守り、記憶を失うような負荷を受けながらも無事に元の世界……覚醒世界まで連れ帰ってくれたのだ、と知った。育ての親に自分を託してくれたのは{HO2}なのだろう。

そしてあなたは思い出す。あなたたちは既に現実世界で一度出会っていた。自分がシアエガになり、ヴェルゼがあの世界を作り出す前。

シュヴァルツヴァルトの森で{HO2}を見つけ、そして今のように知り合ったのだ。その時は、まさか自分の命を救ってくれたのが{HO2}だとは思わなかったが。

◆HO2 HO 更新

▽HO 追加情報：想起のブリュンヒルデ

あなたは思い出す。あの日、{HO1}の母親(ノルン)とともにシュヴァルツヴァルトに逃げ込んだ際に異世界に繋がる門を発見しそのままこの地に来たのだ、と。

そして{HO1}の母はこの大樹の根元で出産し、あなたに赤子の{HO1}を託したのだ。そして大樹によって覚醒世界に戻ったのち、もう限界を超えていたあなたは通りすがりの人間に{HO1}を託してシュヴァルツヴァルトの奥で長い間休眠状態に入ったのだ。その長い眠りのなかで記憶を失い、次目覚めた時、たしか一度目の出会いのとき、{HO1}に拾われ、今のように知り合ったのだと。

その時はあの時抱いていた赤子だとは、思いもしなかったが。

探索者達は全てを知り、そして全てを思い出した。

ずっと前からこの因果は続いていたのだ。そして何度も廻り、そうしてまたこうして出会った。自分達の存在は勝手に押し付けられたものかもしれない、それでも誰かの祈りと願いによって繋がれた命なのだと理解できるだろう。

愛され、願われ、そこに存在し 未来を歩むことを望まれた命なのだ。

「もしお前たちが世界に打ち勝ちたいと願うのであれば私は手を貸そう」

「このままではお前達の未来を願った人間が愛した世界も 何もかもが終わってしまう」

「……旧き神々はすでに、この世界線を見捨てるか否かを決めかねている」

「今お前達の生きている世界を救うには、お前達が目覚め、そしてこの抗いがたい運命に打ち勝つ他ない」

ヴァルトラウテ……ヌトセ=カームブルは探索者に向き直ると真っすぐこちらを見据えてくる。言葉の意味を問うたとしても、恐らく抗うか抗わないかの二択を選び取るまで何かを答えることはない。

抗う選択をとるのであれば、今度は大いなる木が口を開く。

「いわばお前達は今{HO1}、お前の左目の中に展開された疑似的なドリームランドの中に居る。お前達だけではない、地球上の全ての生命の魂は今そこに幽閉されているのだ」

「そしてその世界の核はお前だ。お前がこの世界を拒絶するのであれば、世界の創造主であるヴェルゼとの繋がりが断たれ 全ての魂は目覚めることができるだろう」

「しかしそれはあの狂気と混乱の最中に全ての魂を送り返すということだ。既に命の失われたものはそのまま死に絶えるだろう」

「それでもこの偽りの安寧を否定するなら、この夢の干渉の失われた空間——私の懷で自死をすることだ。なに、本当に死ぬわけではない。お前達は今夢の中で夢を見ているような状態なのだ」

「だから、まずは元の肉体に魂を戻す必要がある。死とは世界の拒絶・世界の認識を断つことではじめてお前達は真実を見ることが許される」

樹は探索者達をゆくりと根で包みそして持ち上げる。

ヌトセ=カームブルはその手に黄金に輝く槍を形成すると、{HO1}に手渡した。

どうやらこれを使って自死をしろ、と言っているようだった。

北欧神話の主神であるオーディンは、かつてルーン文字を会得するためユグドラシルの木で首を吊り、グングニルに突き刺されたまま自分を自分自身、最高神オーディンに捧げたという逸話がある。

探索者達もまた、世界の真理を得るために。

夢見る自らを本来の自分へと手向けることで、目覚めを迎える必要がある。

探索者が自らの体に槍を突き立てるのであれば、痛みは一切感じなかった。

ただただ突き刺した部分から光の粒子があふれ出し、そして周囲を白く照らした。一瞬の閃光が轟くその瞬間、大いなる樹の根元に1人の女性がこちらに微笑んでいるのが見えた気がした。

「いってらっしゃい 私のかわいい子供達」

そうして、もう一度、意識を失った。

■ 目覚め

通常、この方法で目覚めると夢見る力を失われるとされるが、今回は特殊なケースであるため、彼らが夢見る力を失うことはない。

目覚め -アノマリオール博物館-

閃光が周囲を白く染め上げた後、ゆっくりと瞼を持ち上げれば。

そこは見覚えのない空間だった。宮殿のような作りの、白亜の床と壁で統一された一面真っ白な空間だった。

現実世界にそのまま目覚めるのではなかったのか？と首をかしげていると、こつこつと靴の音が木霊した。そちらを見やればアルバが立っていた。いつも通りの飄々とした様子で、なんてことないといった様子でこちらに片手をあげて挨拶をしてくる。

「やあ、久しぶり！来るのが遅かったからちょっと迎えに来ちゃった」

「大変なこと続きだっただろう？だから少し 現実に戻る前に息抜きをさせてあげようと思ってね」

「さて、アノマリオール博物館へようこそ！人間には文化的活動は必要だろう？まあついておいでよ。色々話もあるだろう」

「私も客人を待たせているから手短かにね」

彼はそのまま探索者を先導するように前を歩き出す。

ついていくのであれば、やはりどこもかしこも白い建材で構成されておりふわふわとした、自らの存在すら危ういものになるような浮遊感を感じた。

暫くすればまた広い空間に出る。そこには計9つの展示物が飾られている。

どれもがガラスケースに収められており、この白い空間の中で異様な存在感を醸し出していた。

心臓部分のないオートマタ、古びているが細かに装飾の施された万華鏡。まっさらな絵画の入れられた美しく繊細な意匠の額縁……あるいは、直径5m以上はある巨大な古時計は古典的なデザインながらも部分的に装飾された金は未だに鈍く光を放っている。

そのどれも、ひと目見ただけで“普通”ではないことは明らかに分かった。

何か曰く付きの、そして今まで見てきたどの作品よりも美しく 我々の知る由もないような技術で作られたものなのだろうと理解できる。

■ 展示品たち

今シナリオを寄稿した企画「ムーサ異装展覧会」の他作者の出展作品である。

順番に「然らば永劫、見よ美し/かあこ」「侵色/エバ」「Utopiumに死す/しらぬま彼方」「静なるテロリスタ/ジャック秘密探偵社」(それぞれ敬称略)からの引用である。(※作者許可済)

「すごだろう、まあそれらはレプリカなんだけれど。本物はこことは違う世界線の地球にあるよ。さすがに本物は借りられなかったからね。同時に存在したらとんでもないことが起きかねないし……ね」

「アノマリオール博物館は〈概念〉のような存在だ。あらゆる時空、あらゆる時代、あらゆる世界に存在し、そしてそのどれもが本物であり本物ではない。ここもその1つなのさ」

彼は視線を会場の隅のほうへと移す。そちらを見やると、美しい見目の少女が立っていた。光が当たると青みがかかる髪を白いリボンで束ねており、目は黄金の月を思わせる神秘的な輝きを放っている。こちらに気付くと、少しおすました様子でドレスの端をつまみお辞儀をする。

そしてアルバは1つの作品の前に立つ。

そこには大ぶりのビー玉程度の大きさの、青いガラス玉があった。タイトルには何も書かれておらず、作者の欄も空欄のまま。

ガラスケースの中に鎮座するそれは光の加減によって色を変え、台座に様々な色を落とした。

良く見ればガラス玉の中には機械的な幾何学模様が描かれているように見え時折鈍く発光しているようだった。{HO1}の左目にそっくりだと感じる。

「さて、この作品だけれど タイトルをつけるなら“空洞の地球”といったところかな」

「驚いたよね、地球そのものをコピーしたドリームランドをこんな小さな玉の中に展開するなんて。随分と昔の天文学者の地球は宇宙の中に浮かんでいるのではなく 地球の中に宇宙が広がっている、って説があったように思うけれど。案外と馬鹿にできないのかもね？」

〈知識 1/2〉 〈天文学〉

「地球空洞説」のことを言っているのだろうと分かる。

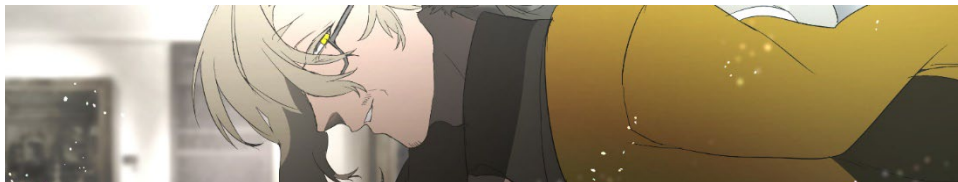
エドモンド・ハレーが提唱した我々の住むこの地球が中身の詰まった球体ではなくゴムボールのように中空であったり、別世界へ繋がっているという考え方のことだ。アガルタ世界などもこの説からくるものだ。

■ 美しい少女

「ムーサ異装展覧会」のイメージキャラクター「ムーサ・コールドウェル」(キャラクターデザイン：畠野おにく)である。

特別出演枠の NPC であるため干渉はできない。鑑賞はできるが。

アルバはガラスケースを取り外し中にあった球体を丁寧に取り出す。
 彼の手の中に収まった球体は鼓動するように数度明滅を繰り返す。
 まるでその命が残りわずかとでも言う様にその光はぼんやりとしていた。



■ スチル

アルバ(美術館)

「さて、君たち人類に悪いお知らせがある」
 「地球を守護していた旧き神々はすでにこの世界線の地球を見放した！すでにこの地球は数度シアエガの復活やその他のイレギュラーによって再構築と巻き戻りを繰り返している。恐らくはこのままでは同じことの繰り返しだろう。救いようのないものを助け続けるほど我々も慈悲深くはない」
 「君達ゲームはするかな？つまるところ現状、進行不能のバグが発生していてこれ以上はプレイしても先に進むことはできないってことさ」

彼は手の中にあった球体を握りつぶすと、その手からはさらさらと粉々になった青いガラスの破片が落ちていく。穏やかな彼の笑顔がこちらに向けられる。
 いつもの陽気な雰囲気はどこかへと消え失せ、いっそ突き刺すような重圧感が体を蝕むようだ。

「しかしながら祝福しよう この世界はいつだってノンフィクションだ。夢見る白痴の神の夢に生まれた幻夢境、情報生命体の見た電子仕掛けの地球の夢。あるいはある男の描いた架空の神話。それが我々の生きる世界 現実 認識そのもの。であるなら世界を認めるのもまた我々の夢なのだろう」

「探索者よ、最後の試練を与えよう。選ぶと良い」

「君達には二つの選択肢が残されている。一つ目は我々旧き神にその目…もう一つの地球を引き渡し 永遠に偽りの世界で虚構の安寧を享受し続ける道。もう一つは夢から醒め、救いようのない地球のために抗う道」

「前者を選べば君達は世界や神々へ抗う力を放棄し探索者としての権利が剥奪される。永遠の安寧とは我々旧き神による完全なる守護を得られる代わりにクトゥルフ神話という神話の世界から追放されるためだ。抗う必要のない世界に探索者は必要ない」

「後者を選べば、何一つ救いの手立ても分からないまま抗うことになる。すでに{HO1}、君はシアエガに取り込まれ、{HO2}、君は瀕死の重傷を負っている」

「今の君たちに何ができるだろう？ 絶望の最中で意味もない抵抗を続けるだけになるかもしれない。それでも諦めず、神々の黄昏の炎に包まれた世界を救おうとする選択だ」

「安寧を望むならその左目を抉り出し、私におくれ。なに、安心するといい。地球は随分君達人間に汚されたが相も変わらず青く美しい。これ以上あの汚らしい神々の手垢のつかないよう飾って永遠に愛でてあげよう そう、永遠に」

彼は青い球体が飾られていた台座を指し示す。黄金に輝く目は、はちみつのような甘露の色に^{とろ}蕩けている。あなたがたの返答を待っているようだ。

質問をするのであれば応えてくれるだろう。

▶ここで探索者が永遠の安寧を求める場合：シナリオエンド「空洞の地球」へ

【問答例】

・(現実世界で)HO1に近づいたのはなぜなのか

「単純な興味だよ 邪な神の血にどれだけ抗えるのか。彼女…リンだったかな？
が託した希望がどれだけのものだったのか」

「…まあ 人間的な言い方をすれば心配してた、が近いのかな」

・どうして旧き神々はこの地球を見捨てるのか？

「救ってもキリがないもの、替えがきくものをわざわざ助ける理由がないのさ」
「愛着があるものを何度も修理して使う気持ちはわかるのだけどね。それに神にも掟はある。どこまで手を貸して良いのか。どこまで干渉していいのか。神はなんでもできるからこそ最も制約を受けなければならない存在なのさ。身に覚えはない？」

「ないならそれでいいけれど。この世界はもうその範疇を超えてしまった」

「これ以上は世界の始まりからやり直さなければならない。それならほかの可能性に目を向けたほうが合理的だろう」

■ 「身に覚え」

KPのことを言っている。

抗う選択をする

抗う選択をとるのであれば、アルバは少し驚いたような顔をして——くつくつと笑った。

そして満足そうにあの温和な笑顔を浮かべると、指をぱちんと鳴らす。

その瞬間、周囲の建物は崩れ去り、そこにあったのは青い透明な膜のようなものに覆われた。

球状の空間だった。まるでガラス玉のなかに閉じ込められたような空間の中、その中央には中空に浮いている青い球体が見えた。

球体の中にはまた小さな球体が浮いていてミニチュアのような大きさの自分達がそれを見ていた。

その球体の中にも更に小さな球体が浮かんでいた。

やはりそれを豆粒のような大きさの自分達がのぞき込んでいる。

……上を見上げる。

自分達を囲んでいる球体のさらに外側は更に大きな球体が囲んでいて、そしてそのさらに外側はもっと大きな球体が囲んでいるのだろうと想像がついた。

何より恐ろしかったのは、自分達を覗いている、自分達より巨大な自分達自身だった。しかし彼らもまた、もう一つ外側の自分達に覗かれていた。

目が合う。

確かに目が合った。

深淵を覗いた時、あなたたちは深淵に覗かれていた。

そう、ずっと。あなたたちの知らないあなたたち自身に。

空洞の地球。まるで鏡合わせのような空間に一瞬だけ悪寒が走る。

〈SANC 1/1D3〉

「世界は鏡合わせだ。この世界が白痴の神の見た夢であるなら、我々もまた世界を夢見る。そして夢の中の我々も夢を見て……そうして、私たちはいつだって世界を形作っているのだ」

「この世界は誰かの夢見た希望かもしれないし、誰かを苛む悪夢なのかもしれない。誰かの祈りで微睡む物語なのか、誰かの悪意で紡がれた悲劇なのかは分からない。だが我々はそのいずれも知る必要はない。胡蝶なのか人間なのかなど大した問題ではないのだ」

「いいだろう、人間。君たちは時に都合よく神に祈り、そして時には神の手を離れていく。生きたいように生きなさい」

「抗え、賽を振るは人のみに許された行為なのだから」

あなたたちの周囲を黄金の光が包み込む。

優しい抱擁するような穏やかで激しい光だった。

探索者達を包んだ光はまるで導くように空高くに突き抜けた。

膜を突き破りその更に先へ。

パリン、パリンと軽やかに何かを割るような音を響かせながらなおも空高く。

翼のように尾をひくそれはまさに黄金の彗星のようだった。

周囲を見やる。あなたがたの周囲に小さな光たちが追従するようにしてついてきているのがわかる。

それがなんとなく、この世界に閉じ込められていた数十億の命なのだろうと察しがついた。偽りの、虚構の世界から、あなたがたを道標に、あなたがたの望む世界へと羽ばたいた。

たんぽぽの綿毛の群れのようにあなたがたの作り出した勇ましい風に乗って、命たちは生きるために、抗うために、懸命に駆けてゆく。

中には途中で碎け散ってしまう光もあった。

すでに現実で失われた命なのだろう。

それでも命は歩むことをやめなかった。

例えば命が弱さを許さなかったとして、しかしそれでもここに、何一つ世界に愛されなかった命などなかったと。

抗うことをやめた命などなかったのだと、あなたがたは証明しなければならない。

偽りの世界からの脱出及び命の証明

永遠にも近い時間と距離を光の速度で駆け抜ける探索者達。

しかし、この無限の入れ子構造の世界を抜け出すには、光速をも上回る速さ、この世界の認識すらも上回り、「理」から外れる必要がある。

神すら欺き、その掌の上から転がり落ちてやるのだ。

さあ賽を振ると良い、**探索者**よ。役者の長いセリフにも疲れた頃だろう。

お前の手でこの“シナリオ”にお前の命を証明するといい。

■脱出ロールについて

これより脱出ロールが発生する。

以下のロールを、5 ラウンド以内に、ひとりにつき3回成功する必要がある。

同時に成功する必要はない。技能は全て同じでも、同じでなくても良い。

- ・探索者を「**探索者**」と証明するに足る技能
- ・「**命を証明**」するのに必要だと思う技能
- ・絶望的な「シナリオ」を覆すのに最適だと思われる技能 ……等

失敗した場合は使用した技能が1つ、永続的に－10%される後遺症が付与されるものの、最後まで辿り着くことは出来る。

成功したのであれば、あなたがたの速度はもはや光も音も超越し、虚構も何もかもを振り払って進んでいく。

そして前方には、こちらに見開いた巨大な大きな青い目があった。

驚愕したように恐れるように見開かれたそれに、構わずあなたがたは突き進む。

そして、その海のように深い青に、

どぶん

海面に落ちたかのように、ゆりゆりと減速させながらその体を沈めていく。

意識は少しずつ白んでいき、穏やかな波間に揺られながら、しかるべき場所へとあなたがたの体を運んでいく。

終わりは、近い。

△生還報酬

・SAN 値回復〈2D6〉

— 第三話「爛醉」 完 —

シナリオエンド「空洞の地球」

抗わない選択をし、彼に左目を明け渡すのであれば、アルバはうっとりとそれを受け取り飲み込んだ。

そして満足そうにあの温和な笑顔を浮かべると、指をぱちんと鳴らす。

その瞬間、周囲の建物は崩れ去り、そこにあったのは青い透明な膜のようなものに覆われた。

球状の空間だった。まるでガラス玉のなかに閉じ込められたような空間の中、その中央には中空に浮いている青い球体が見えた。

球体の中にはまた小さな球体が浮いていてミニチュアのような大きさの自分達がそれを見ていた。

その球体の中にも更に小さな球体が浮かんでいた。

やはりそれを豆粒のような大きさの自分達がのぞき込んでいる。

……上を見上げる。

自分達を囲んでいる球体のさらに外側は更に大きな球体が囲んでいて、そしてそのさらに外側はもっと大きな球体が囲んでいるのだろうと想像がついた。

何より恐ろしかったのは、自分達を覗いている、自分達より巨大な自分達自身だった。しかし彼らもまた、もう一つ外側の自分達に覗かれていた。

目が合う。

確かに目が合った。

深淵を覗いた時、あなたたちは深淵に覗かれていた。

そう、ずっと。あなたたちの知らないあなたたち自身に。

空洞の地球。まるで鏡合わせのような空間に一瞬だけ悪寒が走る。

〈SANC 1/1D3〉

「世界は鏡合わせだ。この世界が白痴の神の見た夢であるなら、我々もまた世界を夢見る。そして夢の中の我々も夢を見て……そうして、私たちはいつだって世界を形作っているのだ」

「この世界は誰かの夢見た希望かもしれないし、誰かを苛む悪夢なのかもしれない。誰かの祈りで微睡む物語なのか、誰かの悪意で紡がれた悲劇なのかは分からない。だが我々はそのいずれも知る必要はない。胡蝶なのか人間なのかなど大した問題ではないのだ」

「だから何も気にする必要などないよ。大丈夫。君たちはずっと何も知らないままにいていい」

その瞬間、世界は黄金で満たされた。

否、黄金の腸に包み込まれたのだ。

それは胎動する黄金、巨大な優雅に動く連結した金色の球体群が最悪の悪夢の蠢くさまを隠していた——……慈悲深くも畏れ深きもの。

情け深いヨグソトース 及び その化身、アルペリヒの真の姿

「ヤード=サダジ」を目撃した探索者は〈SANC1D8/5D10〉

そのまばゆい光に包まれ、あなたがたは目を閉じる。

もはやなにも見つめることなどないようにと。ただそれだけを祈って。

.....
.....
.....
.....

黒々とした雲が渦巻いている。周囲は怒号、悲鳴、^{あびきょうかん}阿鼻叫喚の狂乱の最中。

傍に居た人間はあなたを見て ^{おのの}慄いたように後ずさりをする。

口を開く。叫び声なのか、罵倒なのか、それを知る術はなかった。

その喉が発したのは金切り声でも怒声でもない。

ただただ露出した喉笛から漏れ出るひゅうひゅうという空気の抜ける間抜けな音だけだ。まばたきののちに、それはあなたの目の前で絶命した。

だが、あなたにとって、それらはどうでもよいことだった。

周囲を見る。小さな町……だったのだろう。

もはや燃え盛る炎に抱かれたそれは見る影も残していない。

真っ黒な、焼け焦げた人間のようなものがあちこちに転がっている。

あなたはそれが愉快でたまらない。

あなたは常に何かに怒りを覚えていた。何に、かは分からない。

だが今この瞬間あなたはどこか晴れ晴れとした心地でいる。

楽しくて嬉しくて仕方がないのだ。

例えるなら風邪をひいていた子供が、元気になった途端外に走り出してしまうような。欲しかったおもちゃを買って貰えた時のような。

そんな無邪気な心地だけがそこにある。

殺す、壊す、引きちぎる。唸り、吠え立て、蹂躪^{じゅうりん}の限りを尽くす。

誰にもあなたを邪魔することなどできない。

もう誰もこんな世界の顛末を知る者などいないのだから。

.....
.....
.....
.....

悪い夢を見ていた気がする。

だがすでにもう夢の内容など覚えていなかった。

取るに足りない内容だったのだろう。

今日はどこへ行こうか。

そんなことを考えながらあなたがたは起き上がる。

外からはまばゆい黄金の朝日が差し込んでいた。

▽シナリオエンド：「空洞の地球」

この世界に NPC は居ない。

探索者も彼らのことを思い出すことはないが、それ以外は穏やかな毎日を生きることができる。ただし探索者自体は永久ロストとし、永遠にこの偽りの安寧の中で生きることになる。